

# キルギス共和国の高等教育機関における 日本語教育実践に関する研究 —「動画制作」を取り入れた授業開発の試み—

西 條 結 人

## 1. 研究の背景と目的

### 1. 1. 研究の背景

国際交流基金（2014）によると、キルギス共和国（以下キルギスとする）における日本語学習者数は2014年6月時点で1054名であり、2012年度の調査（777名）と比較すれば増加している。しかしながら、学習者の多くが、日本での就職を希望しているものの、日本語を使う職種への就職には直結しないということも報告されている。また、キルギス国内には日本語母語話者のコミュニティも無く、教室内で会話能力向上を重視した日本語授業を受講しても、教室外で日本人と接触するような環境や機会はほとんどないというのが現状である。この現状は、福島・イヴァノヴァ（2006）の「孤立環境における日本語教育」の定義に当てはまると思われる。「孤立環境における日本語教育」とは、「地域内に日本語コミュニティがなく、旅行、留学等で日本に行くことも稀で、教室外で日本語との接触のない海外環境における日本語学習環境」のことを指す。孤立環境下の日本語学習者にとっては、コミュニケーション的な日本語運用能力を向上させることは、日本語の使用機会も限られ、容易ではない。

そこで本研究では、上述のような状況下における実践の一例として、「動画制作」を用いた日本語授業に着目した。動画制作を行い、キルギスから日本語で情報を発信（動画配信）することをきっかけとし、視聴者となる日本語母語話者や、世界の日本語学習者との日本語を用いた接触機会の増加が考えられる。動画制作という手法を用いて、キルギス国内の「孤立環境」下にある日本語学習環境の改善も期待される。

日本語動画作成の取り組みとしては、鶴澤（2015）が挙げられる。鶴澤（2015）はスーダンのハルツーム大学アフリカ・アジア研究所で開講されている日本語授業で動画を作成し、日本語動画コンテストを行っている。動画は、スーダンの「基本情報」「料理」「習慣」「社会問題」「昔話」「服装」をテーマとし、学習者がドラマや、ニュース番組、影絵劇、アニメーションという手法を用いて作成したと報告している。その結果、鶴澤（2015）は、次の3点の有効な点があると述べている。第一は、学習者自身のレベルが確認でき、作品としても残ること、第二は学習者にとって身近な話題の教材として利用できること、第三に日本語コー

スの広報として利用でき、スーダンの紹介材料にもなることである。

動画制作のように、「学習者が何かの役を演じる」演劇的手法を利用した語学教育の例としては、Richard (1981) のドラマ・メソッドがある。ドラマ・メソッドは、ドラマを利用して外国語を教える教授法で、ドラマに期待される効果として、Richard (1981) は次のような利点があると述べている。

- ①ドラマは生徒にその言語を使う理由を教えてくれる
- ②ドラマは社会・文化的環境での言語の使い方を教えてくれる
- ③ドラマはコミュニケーションの経験を通じて言語の使い方を教えてくれる
- ④ドラマは劇ができたという満足感を与えてくれる
- ⑤ドラマは学習への自らの動機づけ (self-motivation) を高めてくれる

また、中山 (2003) では、ドラマ作りを取り入れた会話授業を行っている。その結果、「ビデオドラマ」制作を取り入れた授業は、グループ内での交流を通じて、「交渉」が生じ、学習者が意見対立や葛藤という日常生活場面ではできない経験をしながら話し合いを重ねることができたと述べている。ドラマだけではなく、動画制作についても同様の効果が期待され、学習者のコミュニケーション能力の向上が期待される。

先行研究での知見を踏まえ、動画制作授業の利点を次のようにまとめた。

- ①学習者にその言語を使う理由を教えてくれる
- ②社会・文化的環境での言語の使い方を教えてくれる
- ③コミュニケーション経験を通じて言語の使い方を教えてくれる
- ④動画制作が達成できたという満足感を与えてくれる
- ⑤学習への自らの動機づけを高めてくれる
- ⑥動画を作成することにより、学習者の日本語到達度がわかる
- ⑦作り上げた動画は教材として利用することができる
- ⑧テーマによってはキルギスや大学の PR として利用できる

(字幕により日本語がわからない人でも視聴可能)

また、縫部 (1990) は「日本語教育の原点は、日本語を学ぶことを通して日本語能力を伸ばすと同時に、生き生きと且つ共によりよく生きる力を発達させることにある」と述べており、演劇的手法を取り入れた活動によって、学生が動作や感情を伴って自然に自己表現することを提案している。

本研究では、キルギス人日本語学習者による日本語母語話者、日本語学習者へ向けた「ピシケク人文大学紹介動画制作」をテーマにした実践を行った。そこで、明らかになった点を課題として抽出し、今後の「動画制作」実践のあり方について提言したい。

なお、本研究におけるキルギス人日本語学習者とは、「キルギスに在住し、キルギス国籍もしくはそれに準ずる資格を有している日本語学習者」とする。

## 1. 2. 研究の目的

本研究の目的は次の通りである。

第一に「孤立環境の日本語教育」下の高等教育機関において、「動画制作」という手法を用いて、言語的側面だけではなく、非言語的な側面も重視した目標言語との接触機会を増やす実践を開発することである。

第二に、動画制作という実践方法の効果を検証し、キルギスにおける日本語教育への示唆を得ることにある。

## 2. 授業の開発

佐野（1995）は言語教育における演劇的活動の活用方法について、「Dialogue を中心にした活動」「オープン・エンドのシナリオや社会的ドラマの活動」「上演を目指す活動」「演技のエクササイズを中心とした活動」の4つの活動に分類している。

本実践で扱う動画制作は、佐野（1995）の「上演を目指す活動」（公開を目指す活動）とし、シナリオ作成から公開までの一連の活動を日本語学習活動として組み込んだ授業の開発を目指す。

### 2. 1. 授業の構成

本実践の構成は次の通りである。実践の実施時期は2016年3月であり、総授業時間は全8コマ（1コマ80分）である。

①準備：オリエンテーション 【1コマ】



②全体活動：動画分析（スーダン日本語チャンネルの分析）【1コマ】



③グループ活動：日本語シナリオ作成・シナリオの読み合わせ 【2コマ】

シナリオのロシア語訳の作成 【授業時間外学習課題】



(36)

④グループ活動：動画撮影・編集【2コマ+授業時間外】



⑤発表・フィードバック：制作動画視聴・発表会【1コマ】

<各グループが制作した動画を発表・学習者間で意見交流>



⑥フィードバック：授業のまとめとアンケート記入【1コマ】



⑦学びの成果の公開：「キルギス日本語チャンネル」での公開

## 2. 2. 実践内容

### 2. 2. 1. 実践の対象者

ビシケク人文大学東洋国際関係学部日本語日本文学科には、東洋文献学（歴史学・言語学）、異文化間コミュニケーション論、国際関係論、国際経済論の専門研究を行う学生が在籍している。英語が必修外国語で、日本語、トルコ語、アラビア語、ペルシャ語、韓国・朝鮮語の5言語の中から、専門研究のための第一東洋言語（主専攻言語）を選択することになっている。学部で開講されている科目「日本語」は、1年生から4年生まで、習熟度別にA、Bの2クラス体制で、1週間に5コマ（1日1コマ）で行われている。この科目は、「会話」「聴解」「読解」「作文」を総合的に行う科目であり、4専攻（東洋文献学（歴史学・言語学）、異文化間コミュニケーション論、国際関係論、国際経済論）の学生が同時に集まるのは、この科目のみである。本実践は8日間の日程で行った。

本実践は、東洋国際関係学部で開講されている学部3年生対象の「日本語」Aクラスでの授業内で行った。当該授業は、日本語を第一東洋言語として学ぶ学生が受講する科目で、3年生Aクラスの担当教員は筆者である。授業を履修している学習者の情報は次の通りである。

対象クラス	対象人数	専攻分野
学部3年生「日本語」 Aクラス	8名 (男性4名、女性4名)	東洋文献学（歴史学・言語学）、異文化間コミュニケーション論、国際関係論、国際経済論

なお、当該クラスの履修登録者数は9名であるが、今回実施した全授業において1名が欠席したため、8名で実施した。

学習者の日本語運用能力については、8名のうち、1名は日本語能力試験N2取得、3名はN3取得、残り4名はN3合格を目指す学生である。

## 2. 2. 2. オリエンテーション

オリエンテーションでは、学習者に対し、実践の概要と目的を説明した。グループ分けについては、清末（2003）で、ドラマ作りはグループの構成員に負うところが大きいということが示唆されていた。動画制作においても同様のことが考えられるため、本実践では学習者の日本語運用能力や性格を考慮し、教師が事前に2つのグループに分けた。その結果、第1グループについては、N2取得1名、N3取得1名、N3合格を目指す学生3人の5名、第2グループについては、今回欠席した学習者1名を除く、N3取得2名、N3合格を目指す学生1名の3名で行った。

グループ分けを行った後は、制作動画の内容やシナリオ構成を話し合う時間とし、下記の要領で動画制作を行うように指示した。

動画視聴者の詳細については、「不特定多数の日本語母語話者もしくは日本語学習者」という聞き手を設定した。これは、作成した動画をインターネット動画サイトYouTube (<https://www.youtube.com>) にアップロードし、学外に情報を発信することを想定したことによる。

- ・テーマは「ビシケク人文大学の紹介」とする。
- ・各グループ動画時間は、5分程度とする。
- ・動画内での言語は「日本語」のみとする。  
※ただし一時的に日本語以外の言語を使用するのは許可する。
- ・撮影場所は問わず、各グループの自由とする。
- ・グループ全員が話す機会を設けること。
- ・動画撮影中は台本を見ながら話すことは禁止する。
- ・動画にはロシア語もしくはキルギス語字幕をつけること。

## 2. 2. 3. 動画分析（スーダン日本語チャンネル）

動画分析では、学習者に「大学紹介動画」のイメージを持ってもらうため、インターネット動画投稿サイトYouTube にアップロードされているスーダン日本語チャンネル (<https://www.youtube.com/channel/UC4INhXaeQhwenUh62ylt8ow>) の「【CM】アフリカ スーダン日本語コース ([https://www.youtube.com/watch?v=Z4O4\\_An3NHA](https://www.youtube.com/watch?v=Z4O4_An3NHA))」を視聴し、分析の対象とした。対象動画は2回視聴した。1回目は教師から学習者へ助言等はせず、感想を書いてもらった。2回目は、教師から動画の「内容」「構成」「言語表現」「情報の取捨選択（情報量）」等の助言を行い、動画分析を行った。なお、この「動画分析」では全体の意見交流、情報共有も行う目的があったため、グループ活動ではなく、全体活動として行った。

その結果、学習者からは「視聴者へのあいさつがあった」「大学のルールや教師を紹介している」「登場する学生が対話形式で進めている」「BGMが用いられている」「日本語コー

スの施設、授業の特徴を説明している」「学生が演技をしながらコースの説明をしている」等の発言があった。

## 2. 2. 4. シナリオ作成・シナリオの読み合せ

シナリオ作成はグループ活動とし、前述の2つのグループに分かれて活動を行った。その後、グループで1つのシナリオを作ることを指示した。学習者は日本語もしくは母語（ロシア語・キルギス語）でディスカッションを行うが、シナリオ執筆は日本語のみとした。シナリオ作成を行っている間に、教師は学習者の質問に答えたり、母語と日本語の社会言語学的差異などの側面から、学習者の言いたいことを日本語に直したり、各グループを巡回しながら机間指導を行った。それぞれのグループが書き上げた原稿は回収し、筆者がネイティブチェックを行った。学習者が作成したシナリオについては、資料Iを参照されたい。

シナリオの読み合わせは、日本語ネイティブチェックしたものを各グループに返却し、グループ内でシナリオの読み合わせを行った。一度、シナリオを読んだ後で、動画を撮影する際に、セリフを話す学習者以外の学習者の立ち位置や表情、ジェスチャーなどの動作・表情を確認し、撮影に向けて教室内で練習を繰り返し行った。教師は、シナリオの読み合わせを行っている際に、感情に合わせたイントネーションやジェスチャー等の指導を適宜行った。

各グループのシナリオのロシア語訳については、グループ単位で授業外学習課題として与えた。回収したものは、ピシテク人文大学東洋国際関係学部日本語日本文学科に所属するロシア語を母語とするキルギス人日本語教師（日本語能力試験N1相当）にネイティブチェックを依頼し、翻訳の正確さ、自然さを確認した。

## 2. 2. 5. 動画撮影・編集

動画撮影については、授業時間内もしくは、学生の希望に合わせて、授業時間外で実施することとした。撮影場所については、作成したシナリオに従い、「日本語日本文学科講師控え室」「日本語日本文学科以外の学科講師控え室（韓国・朝鮮語文学科、中近東諸語文学科、国際関係学科、歴史学科）」「講義室」「東洋国際関係学部図書館」「大学正面玄関」「大学食堂」「コンサートホール」「ボランティア・サークルSIDOKの部室」等で撮影を行った。撮影は、グループごとに行ったが、2つのグループが一緒に学内を移動し、共通する撮影場所があれば、交互に撮影する方法をとった。これにより、異なるグループの学習者同士で日本語表現やジェスチャー・表情、立ち位置などの面を指摘し合ったり、アドバイスを送ったりする様子もうかがえた。

動画編集については、授業時間外に、学習者の希望を聞きながら、教師と共同で行った。各グループの動画には、ロシア語字幕と日本語字幕を付け、日本語母語話者や日本語学習者、

ロシア語話者が動画を視聴しても、内容が理解できるようにした。日本語動画に日本語字幕を付けたことで、日本語学習者にとっては音声聞くのみだけでなく、日本語字幕を読むことで、より内容を理解してもらえらる点や、また、聴覚に障害のある人々にも、音声が無くて内容が理解してもらおうことができる点といった観点から日本語字幕版を作成した。

## 2. 2. 6. 動画視聴・発表会

「動画分析（スーダン日本語チャンネル）」以降は、動画制作は2つのグループに分かれて行っていることから、グループの異なる学習者同士が交流する機会が無いことになる。そのため、本実践では、グループでの動画制作後に、2つのグループが制作した動画を共有し、意見交流する場として動画視聴・発表会を設定した。これにより学習者間でフィードバックを行うことが可能となり、学習者主体のコミュニケーション活動機会が増加することや、それぞれのグループが制作した動画を視聴することで、新しい視点を得る機会となることが期待された。また、発表グループ以外の学習者は、聞き手という立場で制作動画を視聴、グループ発表を聞くため、動画の内容や構成、言語表現等を理解する必要がある。これにより、作成した動画そのものが学習の手立てとなり、教材として活用できた。

発表会では、「2つのグループに特徴があって面白かった」「カメラワークが良かった」「声が小さかったり、撮影場所の騒音あったりして音声聞き取れないところがあった」「内容が似てしまった」「大学についてもっと調査しておけば良かった」「2つのグループではなく、今度はクラス全員で動画を制作してみたい」等の意見交流が行われた。

発表会の後で、動画制作を行った学生を対象にアンケート調査を行い、本実践へのフィードバックを得た。

## 2. 2. 7. 「キルギス日本語チャンネル」での公開

本実践で制作した動画は、インターネット動画投稿サイト YouTube の「キルギス日本語チャンネル (<https://www.youtube.com/channel/UC6ay1J-365qQ8TFMxqd1SuA>)」で公開することとした。「キルギス日本語チャンネル」は、ビシケク人文大学東洋国際関係学部日本語日本文学科が、教育成果の公開と、キルギスの情報発信のために開設したチャンネルである。

制作動画は、それぞれ「ビシケク人文大学紹介ムービー①（日本語字幕 ver.）(<https://www.youtube.com/watch?v=fYCw9IQtNbE>)」「ビシケク人文大学紹介ムービー②（日本語字幕 ver.）(<https://www.youtube.com/watch?v=KachQgBZxX8>)」の日本語字幕版、「Добро Пожаловать в БГУ! (часть 1) (<https://www.youtube.com/watch?v=8eKdhFYZYvE>)」「Добро Пожаловать в БГУ! (часть 2) (<https://www.youtube.com/watch?v=6fA3IzJTAIw>)」

(40)

のロシア語字幕版の計4本を2016年4月に公開した。2016年5月現在、キルギス、日本の他に、カザフスタンやロシア等、旧ソビエト連邦圏をはじめ、世界中の国で視聴されているようである。

### 3. 考 察

実践後、筆者は授業の振り返りを記録にまとめ、学習者に授業評価アンケート（資料Ⅱ）を行った。それらを用いて、今回の授業実践の成果と今後の課題について考察する。

#### 3. 1. 筆者による振り返り

筆者による実践の振り返りは次の通りである。

##### 1) 授業の方法に関する振り返り

- ・動画制作実践は、シナリオ作成・シナリオの読み合わせ・撮影と時間がかかる。
- ・グループ活動において、積極的な学生が消極的な学生に協力を促し、それぞれの役割をグループ内で決め、適材適所に振り分けていた。
- ・学生の発話量に差が出ていた。
- ・授業内で動画を撮影したため、2つのグループが同一時間に撮影することとなったが、それぞれが監督、カメラ撮影役、セリフの補助役、環境整備アシスタント等に分かれ、撮影以外のグループが役割をこなしていた。

今回の実践では、グループ活動にしたことが、学生にとって良い効果を生み出したが、一方で受け身の学習者が主体的に取り組むにはどうすればよいか、グループ活動中の教師の役割を事前に明確にし、入念に計画しておく必要がある。

##### 2) 授業内容に関する振り返り

- ・今回の実践では、動画分析において「聞く」、シナリオ作成時に「話す」「書く」、動画撮影・編集において「話す」「読む」「聞く」、発表会で「話す」「聞く」が必要とされた。つまり、動画制作実践は、「話す・読む・書く・聞く」の4技能を総合的に運用でき、学生が主体的に活動できる実践であった。
- ・イントネーションやジェスチャー等は、学生のみでは言語表現に限界があり、教師のサポートが必要である。
- ・シナリオを作成する際に、動画のテーマに関する既存知識が無ければ、シナリオを作成することが難しい。シナリオの作成前に、テーマに関する学習をし、情報を取捨選択す



る必要があった。

今回、「スーダン日本語チャンネル」の動画を参考に分析を行ったが、ビシケク人文大学に関する情報収集を行わなかったために、シナリオ作成に苦慮するグループも見られた。シナリオの作成前に、テーマに関する事前学習をし、情報を増やしておく必要がある。

### 3. 2. 学習者による授業評価をもとにした考察

動画制作実践後、学習者に今回の実践に対する評価をアンケート用紙に母語で記入することを求めた。以下に、アンケートから得られた感想を「動画制作・成果の公開について」「授業の進め方について」「グループ活動について」「今後の授業内容について」ごとにまとめる。

#### 1) 動画制作・成果の公開について

- ・ YouTube に「キルギス日本語チャンネル」を立ち上げたのは非常に良いことだと思う。将来、ビシケク人文大学に入学を希望する人のためには良い情報源になる。
- ・ 卒業した学生にとっても、大学紹介動画を見て学生生活を思い出すことができる。
- ・ 動画制作を通じて、私自身の日本語能力が向上したと思う。
- ・ これからは、もし大学に日本人が来た時に、自身が所属している大学について話すことができる。
- ・ インターネットには、キルギスやビシケク人文大学の情報は少ないので、このような取り組みは非常に効果的であると思う。これからも、動画制作を通じてキルギスの良いところを世界中の人々に発信していきたい。

動画制作・成果の公開については肯定的な意見が目立った。特に、今回設定したテーマでは、ビシケク人文大学入学希望者への情報提供の手段になりうることや学習者自身の大学生活の思い出として残る等の意見が挙げられた。

#### 2) 授業の進め方について

- ・ 授業時間内に動画を撮影することはあまり良くないことのように感じた。
- ・ それぞれのグループで色々なアイデアを出していくところが一番面白さを感じた。
- ・ 何回もセリフを練習することで、頭の中に記憶として残るため、日本語能力が向上すると思う。
- ・ 学生がセリフを間違えて話している時には、先生にすぐに訂正してほしい。
- ・ 2つのグループで同じテーマだったので、違うテーマにするともっと面白いと思う。

(42)

- ・グループ内でそれぞれの役割を演じることができた。
- ・教室の外に出て日本語を使うことは初めての体験で面白かった。

授業の進め方については、授業時間内に動画を撮影することは良くないと感想を述べた学習者がいた。それには、撮影場所の制約（撮影を希望する教室が空いていない）や屋外で撮影する際に天候に左右される等が考えられる。しかしながら、授業時間内で行うことでの利点（受講学生が一堂に会する、クラス単位で撮影できる等）も考慮しながら、より良い授業構成・進め方を今後検討していきたい。

### 3) グループ活動について

- ・今回の授業では、2つのグループに分かれて動画を制作したが、グループ間で同じ情報にならないように注意することが難しかった。結局のところ、あまり違いのない動画になってしまった。
- ・グループの仲間と日本語で会話をすることが新鮮で、これからもロシア語やキルギス語ではなく、日本語で話そうと思う。
- ・グループの仲間と一緒にビデオを撮ることができて、とても良かった。
- ・シナリオをグループで考え、それをロシア語に翻訳することが面白かった。

グループ活動については学習者から好評を得た。日本語を使用する動機付けが高まった学習者も見られたことやクラス内の交友関係の向上にもつながったようである。通常の授業でも日本語を使用する機会は設けているものの、今回のような動画制作のような場面での日本語使用は学習者にとって新鮮であったようである。

### 4) 今後の授業内容について

- ・大学紹介動画の取り組みはとても面白い。これからも動画制作のような授業機会が増えれば良いと思う。
- ・次回の授業では、「日本の侍」や「日本の歴史」「キルギスの学校」「キルギスの大学生の生活（大学生の1日）」を紹介したい。「キルギスの文化」「キルギスの観光」について動画を制作したい。
- ・動画制作の授業も良いけれども、普段行っている文法やロールプレイも行いたい。

上述のように、動画制作授業の機会を増やして欲しい学習者と通常の文法や会話の授業を並行して行うことも求める学習者もいることが明らかとなった。動画制作実践を「総合的な

日本語」の授業として位置付け、会話・作文・読解・聴解の4技能のバランスに配慮した授業をデザインしていきたい。

#### 4. 本研究のまとめと今後の課題

##### 4. 1. 本研究のまとめ

本研究では、「孤立環境の日本語教育」下の高等教育機関において、動画制作という手法を用いて目標言語との接触量を増やす実践を開発することを目指した。動画制作は、言語表現だけではなく、ジェスチャーのような非言語的な側面も同時に学習でき、既習の文法知識と社会言語学的・語用論的知識をつなげ、それらを結びつける効果があったと思われる。特に、学習者が主体となって場面設定を考えることで、既習の文法を「どこで」、「どのように」使えば良いのかを理解しやすくなり、より効果的に習得できるようになると考えられる。また、日本語運用能力の向上だけではなく、グループで日本語や媒介語（ロシア語・キルギス語）で意見を積み重ね、1つの動画を制作することを通じて、学習者間の関係性も更に深まったようである。

今回、大学紹介をテーマとした実践を行い、学習者からはおおむね好意的な感想を得た。学習者にとっては、日本語の授業の成果が、学外に向けて公開されたことで、今後の日本語学習に対して、動機付けが高まったように思われる。学習者の国の文化を発信していきたいという意欲や姿勢の向上にもつながったようである。

##### 4. 2. キルギスの日本語教育への示唆

本実践で得られた知見は、キルギスの高等教育における日本語教育に対して次の3点で貢献しうるものと思われる。第一は「学外への成果配信の意義」、第二は「学習者主体の日本語教授法の開発」、第三は「高等教育機関としての社会貢献・還元」である。

「学外への成果配信の意義」については、キルギスの日本語教育の現状「孤立環境の日本語教育」からの脱却を図ることである。YouTubeなどで日本語教育の成果を公開することで、限られた日本語空間からの脱出と世界の学習者交流ネットワーク構築に繋がると思われる。特に、成果物を視聴した日本語母語話者や世界中の日本語学習者との接触機会が増え、従来からの日本語母語話者対キルギス人日本語学習者に加え、キルギス国外の日本語学習者対キルギス人日本語学習者との接触場面の増加も期待される。制作した動画をきっかけとして、Skype等のツールを利用し、視聴者のリアクションを生み、情報発信者側と視聴者側の双方向的な交流機会へとつなげていきたい。これにより、教室内外での日本語接触機会の増加につながり、「孤立環境」の改善に繋がると思われる。今回の取り組みにより、スーダンや他

国の日本語教育機関、学習者との交流が促進され、地域や物理的距離に関係なく、地球規模での日本語を使った交流が可能になると思われる。また、今回の制作動画には、すべてロシア語字幕を付したことから、日本語母語話者や日本語学習者だけではなく、キルギス国内、ロシア語圏諸国の視聴者とも交流が促進されることが期待される。

「学習者主体の日本語教授法の開発」として、川口（2012）の「文脈化」指導の実践が挙げられる。「文脈化」とは、「特定の文法・語彙項目を指導するとき、その項目が「誰が・誰に向かって・何のために」使われるものであるか明示すること」である。動画制作においても、「文脈化」は重要であり、「孤立環境」のキルギスにおいては、それぞれの学習項目の「文脈化」指導はより重要であると思われる。学習者自身が1つ1つの学習項目を、文脈の中で何かの役割を演じながら使用することにより、主体的に日本語を習得することが重要である。動画制作は、学習者に「文脈化」を意識してもらうための手立てであり、学習者主体の教授法の1つになりうる事が考えられる。

「高等教育機関としてキルギス社会へ貢献・還元」に関しては、今回の動画制作授業では、インターネットの動画配信サイト YouTube を活用し、社会に広く情報を開示した。このことにより、大学の教育への取り組み・学習成果を社会に発信し、キルギス国内の日本語教育の普及・充実に貢献することが可能であると思われる。西原（2013）は、日本の大学の国際化と外国語（日本語）教育の関わりについて、「外国語を学ぶということ自体が、日本語でなくても、何語であっても、地球の視野の獲得に貢献する」とことと述べている。キルギスの日本語教育においても同様であり、外国語として日本語を学習することで、国際的視野の獲得が可能となる。さらには、日本語を使って世界に向けて情報発信することで、学生が、自文化とは異なる背景を持つ人々を対象に、情報をわかりやすく伝えることを意識するきっかけになると考えられる。これにより、大学の国際化も促進する効果があると思われる。視聴者にとっても、動画を視聴することで、その動画を参考に情報発信や新たな取り組みを始める動機付けになることも期待できるであろう。ただし、今後、発信した情報を受け手がどのように捉えているかを、インターネット上のアンケートサイト SurveyMonkey (<https://www.surveymonkey.com>) 等のツールを利用した見えない相手（動画視聴者）を対象にした調査や、Skype を用いた対面型のインタビュー調査等を行い、検証する必要があると思われる。

#### 4. 3. 今後の課題

本実践は、計8回という授業回数の中での試みであったが、「ビシケク人文大学紹介動画制作」という授業内容は学習者から好評を得た。しかしながら、ビシケク人文大学東洋国際関係学部日本語日本文学科所属の学生は「4つの専門研究（東洋文献学（歴史学・言語学）、

異文化間コミュニケーション、国際関係論、国際経済論)のための日本語学習」を行っていることから、学習者からのニーズに配慮しつつ、今後は学習者それぞれの専門性を考慮した日本語授業をデザインしていく必要があると思われる。

キルギス国内は、国土のほとんどが山地で、且つ陸路中心の移動手段しかなく、都市間交通アクセスの状況が悪いという現状がある。そのため、キルギス国内の学習者間の交流の機会は、毎年1回開催されるキルギス共和国日本語弁論大会のみの1度しかない。今後、キルギスの日本語教育をより充実、発展させるためには、キルギス国内の学習者間で交流する機会を増やす必要があると思われる。学習者以外にも教師間のネットワークづくりも課題であり、直接会って交流する機会は、春季と夏季に行われる日本語教育セミナーの1年間に2回のみに限られているのが現状である。その改善策の1つとして、今回のような動画制作という手法を用いて、インターネット上での動画上映会等、物理的な移動を必要としない機会の設置が必要であろう。各機関の教育成果を共有するイベントの開催の検討をキルギス共和国日本語教師会や日本語教育関係機関に促していきたい。さらには、動画制作手法や「キルギス日本語チャンネル」等の媒体を通じて、キルギスと同様に「孤立環境」にある日本語学習者や教師とつながり連携することで、世界規模のネットワークの構築にも取り組んでいきたいと考えている。

### 〈引用・参考文献〉

- 伊藤嘉一 (1984) 『英語教授法のすべて』 大修館書店
- 鶴澤威夫 (2015) 「スーダンで挑戦！日本語動画コンテスト実践報告」『中東日本語教育セミナー 2015』 (<https://www.youtube.com/watch?v=4lMXUg3GG8w> : 2016年3月8日アクセス)
- 川口義一 (2012) 「第2章 日本語教育における「演じること」の意味－文脈化で学ぶ文法」『ドラマチック日本語コミュニケーション「演劇で学ぶ日本語」リソースブック』、pp.59-77、ココ出版
- 清末逸子 (2003) 「ドラマ作りを通して行う日本語学習」『日本教育方法研究会誌』10(1)、pp.34-35、日本教育方法研究会
- 国際交流基金 (2014) 「日本語教育 国・地域別情報 キルギス」 (<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2014/kyrgyz.html> : 2016年3月25日アクセス)
- 佐野正之 (1995) 「Drama Method」『現代英語教授法総覧』、pp.209-214、大修館書店
- 中山由佳 (2003) 「「ビデオドラマ作成」授業の可能性」『講座日本語教育』39、pp.122-138、

(46)

早稲田大学日本語研究教育センター

西原鈴子 (2013) 「大学の国際化と日本語教育 (大学における日本語教育の意義と可能性)」『シリーズ新しい日本語教育を考える』1、pp.15-41、立教大学

縫部義憲 (1990) 「演劇的手法を用いた日本語教育－学際的アプローチ」『広島大学日本語教育学科紀要』1、pp.1-8、広島大学

福島青史・マリーナ・イヴァノヴァ (2006) 「孤立環境における日本語教育の社会文脈化の試み－ウズベキスタン・日本人材開発センターを例として」『国際交流基金日本語教育紀要』2、pp.49-64、国際交流基金

Richard Via (1981) An answer to the EIIL problem, *English for cross-cultural communication*, pp.200-210, Macmillan

### 【附記】

本稿は、2016年3月27日にビシケク人文大学で行われた「2016年キルギス日本語教育春季セミナー」での研究発表「キルギス共和国の高等教育機関における日本語授業の実践研究－大学紹介動画制作の試み」を基に、大幅に修正・加筆を行ったものである。セミナーで貴重なご意見をくださった各日本語教育機関の先生方に感謝申し上げます。

(さいじょう ゆうと・カラサエフ記念ビシケク人文大学)

## 資料 I 動画制作授業で使用したシナリオ

場面① 自己紹介

A,B,C,D,E: みなさん、こんにちは！Здравствуйте!

A: 私たちはキルギス共和国にあるビシケク人文大学の学生です。こちらは、B、C、D、E です。私はAです。よろしくお願ひします。Мы студенты Бишкекского Гуманитарного Университета. Это B, C, D и E. А меня зовут А.

B: 私たちは東洋国際関係学部で日本語を勉強しています。Мы учимся на факультете Востоковедения и Африканистики.

C: 日本語を勉強している学生は、4つの専攻に分かれています。Существуют 4 направления с обучением японского языка.

D: 私は3年生で国際関係論を専攻しています。Я учусь на 3м курсе по направлению «Международные отношения».

A: 私も3年生です。異文化コミュニケーション論専攻です。Я учусь на 3м курсе по специальности «Лингвистика».

B: 私は国際経済論専攻です。3年生です。Я так же учусь на 3м курсе по направлению «Мировая Экономика».

C: 私は4年生です。専攻は、歴史学です。А я являюсь студенткой 4го курса. Направление «История».

E: 私は異文化コミュニケーション論専攻の3年生です。Я студентка 3го курса по специальности «Лингвистика».

C: これから私たち5人がビシケク人文大学の紹介をします。И сейчас мы бы хотели показать вам наш БГУ.

A, B, C, D, E: よろしくお願ひします！行ってきます！Ну мы пошли!

場面② 教室紹介

A: (3 1 4г) 私たちはこの教室で日本語を勉強しています。В этом кабинете у нас проводятся уроки японского языка.

B: (3 1 4гのクローゼット) 後ろにあるクローゼットの中に日本の浴衣と着物があります。着物を着て参加する大学のイベントもあります。А вот здесь, находятся японские юкаты и кимоно, Мы используем их для различного рода мероприятий.

D: (3 1 6б) こちらは国士館大学キルギスキャンパスの教室です。ここでも日本語を勉強しています。А это офис кыргызского филиала университета Кокушикан. Студенты так же обучаются

здесь японскому языку.

西條：はい。じゃあ今日はこれで授業を終わらしましょう。ありがとうございます。На этом я заканчиваю сегодняшний урок. Спасибо!

A, B, C, D：ありがとうございます。Спасибо!

### 場面③ 食堂

A：あ～あ、お腹がすいたな～。Купать хочется.

B：うん、僕も腹ペコだよ。そろそろ、どこかで何か食べない？ Я тоже проголодался. Может пойдем перекусим?

A：うん、いいよ。じゃ、食堂に行こうか。Хорошо. Пошли тогда в столовку.

B：みなさん、ビシエク人文大学には食堂が6つあります。でも、今日は一番人気がある食堂に行ってみましょう。Друзья, в БГУ находится около бти буфетов, но мы решили пойти в одну из самых известных.

C：はい、こちらです！ А вот и она!

D：うーん！これはとてもおいしいですよ！ Вкуснятина.

A：私たちも何か買って食べようか？ Пошли тоже что-нибудь купим.

B：うん。 хорошо.

.....

全員：いただきまーす！ Приятного аппетита!

.....

全員：ああ～！美味しかった！ Было вкусенько!

### 場面④ 廊下

C：私たちの大学にはSIDOK（サイドック）というボランティア・サークルもあります。Также, в нашем университете есть волонтерский клуб под названием «Сайдок (SIDOK)».

A：子供たちのサポート活動やバリアフリーを目指す活動をしています。Мы осуществляем такие проекты как «Жизнь без барьеров» и помощь детям.

B：カンファレンスも開催するなど、色々な活動をしています。Также мы проводим различного рода конференции и многое другое.

### 場面⑤ 学部・学科紹介

D：日本語の学科室に入ります。Перед вами кафедра японского языка.

A：こちらは日本語日本文学科の学科長、F先生です。Заведующая японской кафедры F.



E : こちらは「異文化コミュニケーション論」担当の G 先生です。Преподаватель предмета «Межкультурные коммуникации» G.

B : 優しく学生をサポートしてくれる H 先生と I 先生です。H と I преподают и содействуют студентам.

C : そして、私たちのクラス担任、西條結人（さいじょう ゆうと）先生です。大学院の授業も担当しています。Преподаватель 2-3го курса, а так же отделения магистратуры Юто Сайджо.

E : こちらは学部長の J 先生です。Это наш декан факультета J.

D : 次は韓国・朝鮮語文学科です。この学科では、韓国語を勉強できます。Далее, хотим представить вам кафедру Корейского языка. Здесь, вы так же сможете изучать корейский язык.

C : 中近東諸語文学科です。この学科では、ペルシャ語、トルコ語、アラビア語を勉強できます。Кафедра Среднего Востока. Здесь так же проводится обучение Турецкого арабского, а так же персидского языков.

E : そして、こちらは国際関係論の学科です。A здесь находится кафедра международных отношений.

C : 最後に、こちらは歴史学科です。И наконец, Кафедра истории.

#### 場面⑥：コンサートホール

C : 私たちの大学では色々なイベントを行います。このコンサートホールでは大きなイベントが開催されます。В нашем университете часто проводятся разные мероприятия. В данном концертном зале проводятся значимые мероприятия.

A : 講演会やコンサート、SIDOK のボランティア会議、日本語弁論大会などです。毎年4月には、東洋国際関係学部の言語フェスティバルもこのコンサートホールで行われます。

Выступления и концерты, конференции SIDOK, конкурс ораторского искусства на японском языке и т.д. Каждый год в апреле в этом зале факультетом востоковедения и международных отношений проводится языковой фестиваль.

#### 場面⑦ 大学の正面玄関

C : みなさん、私たちの大学はいかがでしたか。Друзья, понравился ли вам наш университет?

D : 興味を持ってもらえましたか。Надеюсь, что было интересно!

A : みなさん、キルギスにいらしてください。そして、ぜひビシケク人文大学にも来てください!

Приезжайте в Кыргызстан. И обязательно посетите БГУ.

A, B, C, D, E : お待ちしています! バイバイ! Мы вас ждем! Пока-пока!

資料Ⅱ

動画制作授業アンケート Опросный лист о работе съемки видео

今回の「動画制作授業」を5段階で評価してください。

5 : とてもそう思う 4 : そう思う 3 : どちらでもない 2 : あまりそう思わない 1 : まったく思わない

Оцените урок съемки видео по 5 - бальной шкале. Отметьте соответствующий вариант в ○.

5 – совершенно верно, 4 – согласен (на), 3 – ни то, ни другое, 2 –против, 1–совсем против.

1. 今回のテーマ「大学紹介」は動画を作りやすかったですか？

Было легко снимать данный ролик «Знакомство с моим университетом»?

5 4 3 2 1

2. 動画制作授業は、普段学習している日本語の表現がどの場面で使えるかわかるようになると思いますか？

Стало ясно использование ранее пройденных на уроке выражений на японском языке в зависимости от ситуации.

5 4 3 2 1

3. 動画制作授業を通じて、日本語学習への動機づけは高まりましたか？

Через съемку этого видео повысилась мотивация к изучению японского языка.

5 4 3 2 1

4. 動画制作授業を通じて自分の日本語力がどのくらいか把握できるようになると思いますか？

Через съемку видео можно узнать, насколько продвинулся уровень японского языка

5 4 3 2 1

5. 制作した動画は日本語の教材として使えると思いますか？

Готовое видео можно использовать в качестве учебного пособия.

5 4 3 2 1

6. 動画のテーマによっては、キルギスや大学のPRに効果があると思いますか？

Видео станет хорошей рекламой Кыргызстана и университета.

5 4 3 2 1

7. この授業は日本語の勉強に役に立ちましたか？

Урок был полезен в изучении японского языка?

5 4 3 2 1

